

# Monthly Report

## 第12回スポーツシンポジウム

### 「リオから東京へ～オリンピックの現在・過去・未来～」を開催



パネルディスカッションの様子

11月28日(月)仙台国際センターにおいて、第12回スポーツシンポジウム(主催:仙台市・仙台大学・河北新報社、協力:スポーツコミッションせんだい)が開催されました。

リオデジャネイロオリンピックで世界中が沸いた今年のテーマは「リオから東京へ～オリンピックの現在・過去・未来～」とタイムリーな話題。リオ五輪400メートルリレー銀メダリストである飯塚翔太氏(所属:ミズノ)をはじめ、現在最も注目される陸上関連パネラーの生の声を聴くことができる絶好の機会と幅広い年齢層の方々がつめかけ、開演の午後6時には、仙台大学朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長、学会の先生方及び陸上競技部の学生たち、明成高校教職員など本学関係者150名を含む約400名が会場となった「萩」ルームを埋め尽くし、熱心に聴き入りました。

シンポジウムに先だち阿部芳吉学長が「今年は特に女子柔道監督として仙台大学の南條充寿教授がリオ五輪で金メダルを含む5つのメダルを獲得したことから、オリンピックを大変身近に感じた年でした。仙台大学は宮城県と連携してジュニアトップアスリート育成も行っており、2018年の冬季オリンピックには本学で練習している中学生が2人、出場できるのではないかと期待されています。本日のシンポジウムを通し、会場のみなさんが新しい考えや知識を得て、2020東京オリンピック・パラリンピックに向かって下されれば大変嬉しいです」と挨拶されました。

(次ページに続く)

#### 〈目次〉

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| 第12回スポーツシンポジウム              | 1-2 |
| 韓国体育大学校金総長が来学               | 3   |
| 第2回秋のブラぞり大会                 | 4   |
| 鈴木省三統括副学長が<br>キワニスクラブで講演    | 5   |
| ゴンザガ大学視察報告                  | 6   |
| 運動栄養学科<br>「給食運営実習Ⅰ」         | 7   |
| 第1回柴田町フットバスウォーク             | 8   |
| 「子ども運動教育学科」<br>高校訪問記        | 9   |
| ヨガ講習会                       | 10  |
| 第9回青少年防災訓練ワーク<br>ショップ円卓会議報告 | 11  |
| 学生の活躍                       | 12  |

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室  
 直通 0224 - 55 - 1802  
 Email kouhou@sendai-u.ac.jp

シンポジウムは基調講演とパネルディスカッションの二部構成で行われ、最初に元NHKエグゼクティブアナウンサー・解説委員で現在法政大学教授の山本浩氏が「オリンピック勝者の論理」と題し、オリンピックで勝つための戦略に関し、日本が成果をあげ、選手の育成に成功している例として卓球競技を紹介しました。最も大切なものの一つは、日本国内だけで満足せず、世界を目指す強い志だそうです。エリートアカデミーで選ばれた優れたジュニア育成には、競技面のみならず、選手たちが海外リーグに参戦する際、家庭教師も海外に同行し、学力面で遅れがないようマンツーマンで指導する、また、揺れ動く青少年期の支えとして、心理学者が常に心のサポートも行うとのことでした。

競技結果を左右するには①個々の力②コンディショニング③周囲のサポート④ライバルの情報⑤適材適所⑥試合の戦術⑦臨機応変な戦略～などがあるなか、一番大事なのは「コンディショニング」だそうで、科学と医学の力も加えた総合力でいかに自分をオリンピックの時に最高の状態に高めていくことができるか？が大切と強調されました。

第二部のパネルディスカッションは山本氏が司会進行をつとめ、前出の飯塚翔太氏、同オリンピックで棒高跳び7位に入賞した澤野大地氏（所属：富士通）、明成高校出身の双子兄弟ランナー、村山謙太氏（所属：旭化成）と村山紘太氏（所属：旭化成）、現役時代に日本選手権400mで三連覇した名取英二氏（所属：仙台大学准教授・陸上競技部長）が、それぞれの立場でオリンピックを振り返り、2020東京オリンピック・パラリンピック、ひいてはその先にある未来を見据え、時にユーモアを交えながら活発な意見交換がなされました。

日本人として64年ぶりの棒高跳び入賞を果たした澤野氏は「オリンピックでは普段通りの自分の力を出すことだけに集中しました。高跳びを始めて25年、36歳という年齢を考え、体に負荷をかけるのではなく効率的な練習をすることで棒を体に引き寄せる技術が今も上達しています」と話しました。

飯塚氏は「ライバルでもあるリレーチームメンバーで確実にメダルをとる練習を積み重ねてきたので、銀メダルを獲得するために支えてくれた全ての方々に感謝しています」と述べました。双子の兄弟である弟の村山紘太氏は「いつも兄の背中を追い、ここまでくることができました。母校の理事長先生、校長先生がいらっしゃる前で申し訳ないのですが、オリンピックの5000m、1万mで入賞するにはもっともっと速く走らなくてはならず、現実的にもう少し順位を上げることを目標にこれからも取り組んでいきたいです」と話し、会場から温かい拍手がおくられました。それに対し兄の村山謙太氏は「オリンピックをテレビで見ながら正直、何故自分がリオにいないのだろうと思いました。自分にとってお互い切磋琢磨できる弟の存在は大きく、肉離れや疲労骨折などの怪我に負けず東京オリンピックには兄弟一緒の出場を狙います」と決意を新たにしていました。

35年学生達を指導してきた名取氏は「指導者が学生の資質を見抜く目は大切です。オリンピックは多くの子どもたちに夢を伝え、人に喜んでもらうことがやがて自分の力になるので、これからもオリンピック選手を育てるといった目標に向かって進んでいきます」と締めました。

シンポジウム終了後、村山兄弟は「出身校の先生方や後輩達を目の前にしてとても緊張しましたが、自分を見つめなおす良い機会になりました。ありがとうございました」と感想を述べました。また名取氏は「今日はたくさんの方々においでいただき楽しかったです。仙台大学の学生達にとっても良い学びの場になったことでしょう」と笑顔で語りました。

会場にいらした太白区の男性は「男の子の孫が中学校で陸上競技（短距離）を始め夢中になっているので、今日のシンポジウムが待ち遠しく、できれば孫と一緒に先生方のもっとためになるお話を聴きたかったです。挫折してもくじけない心、周りの人に感謝して仲間と共に世界を目指す豊かな歩みを是非、今のうちから我が家の孫だけではなく、被災地の子どもたちに身に着けて欲しいと思います」とおっしゃっていました。明成高校と仙台大学が高大連携して取り組んでいるスポーツを通した青少年育成の教育プログラムに関し、多くの方々にご理解いただけるシンポジウムとなりました。なお、この件に関する詳細な記事は平成28年12月14日の河北新報朝刊に掲載される予定です。



名取英二准教授（右）と村山謙太選手（明成高校出身）

## 韓国体育大学校 金総長らが来学～被災地も訪問～

11月11日（金）～12日（土）の2日間、本学と国際交流協定を締結している韓国体育大学校より金総長ら3名の方々が入学されました。

12日（土）には石巻市立大川小学校を視察しました。北上川河口から約4kmの川沿いに位置する大川小学校が近づきますと、震災の記憶として残している建物が見えて来ます。平成23年3月11日の東日本大震災で全校児童108人の7割に当たる74人が死亡、行方不明となりました。その被害状況がまざまざと蘇えるような、姿が現れ、言葉に表せない思いがしました。金総長もかなり強烈な印象だったように見え、手を合わせてお祈りされる姿が印象的でした。また、当時の写真には小学校周辺に存在した住宅が被害に遭い、全て無くなり、今は別なところに住むこととなりました住民の方々には、今も不自由な暮らしを強いられていることが偲ばれました。



大川小学校の慰霊碑に花を手向ける金総長

【報告 事業戦略室 西塚重良】

## ベトナム・ハノイ大学日本語学部の学生が入学

2013年に本学と協定を結んだベトナム・ハノイ大学から日本語学部長を団長とした学生8名が11月16日、17日に本学を訪問しました。外国語大学から総合大学となったハノイ大学の学生にとって、体育大学である本学の情報が乏しく、正に興味と関心を持つての視察でありました。今回の訪問はキャンパスを実際に歩きながら本学の魅力を紹介できるチャンスであることから、朴澤理事長・学事顧問自らキャンパスツアーを行いました。ハノイ大学生が興味を持ちやすい研究・分析を中心とした教室、機材を紹介したほか、齋藤学科長の剣道の特別指導やATルームでテーピングを巻く体験など学生達はとても楽しんでいました。

【報告 事業戦略室 鈴木美生】



朴澤理事長・学事顧問の説明に耳を傾けるハノイ大の学生

## 保護者のための就活セミナーを開催

10月29日（土）13時からB300番教室において、「仙台大学保護者のための就活セミナー」が実施されました。当日は、強風が吹く悪天候にもかかわらず、142名の保護者の方にお集まりいただきました。前半では、「就職活動を巡る昨今の状況と保護者の役割」と題し、仙台大学の学生に焦点をあてた切り口で藪耕太郎准教授（創職チームリーダー）より説明がなされました。

引き続き「教員採用試験の現状と対策」においては、教職支援センターの井上雅勝教授に仙台大学の教員採用試験の出願状況や宮城県の教員採用試験の状況、また本学の教員志望者への支援や取り組みをご説明頂きました。

後半では、株式会社ディスコ東北支社の支社長加藤淳氏より「大学生を取り巻く就職環境と就活における親のかかわり方」をテーマに就職情報会社のお立場からご講演頂きました。そこでは、現在の就職環境や就職活動の流れ、保護者の皆さまにご理解頂きたいことや保護者の役割についてお話し、あつという間に予定の2時間を過ぎてしまいました。

うれしいことに後日、学生が入試創職室を訪れ、これまであまり親子の会話がなかったのですが、保護者のセミナーの開催を機に急に母親が話しかけてくれるようになり、「話の内容は“そんなのわかってるよ”というような内容であっても、すごく心強いです」と話してくれました。母親に背中を押された学生は早速、情報収集にあたっていました。

これからも創職チームでは、目標達成に向けて大学・家庭一丸となって目まぐるしく変わる就職環境に立ち向かって参りたいと思いますので、ご理解・ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

【報告：入試創職室 中鉢芳尚】



講師の話に熱心に聴く保護者

## 「第2回秋のプラぞり大会」を開催



レースを見守る仙台大の学生と子どもたち=太陽の村

11月5日（土）、柴田町の太陽の村で、「第2回秋のプラぞり大会」が開催されました。小学1年生から小学6年生までの仙南地域の子供たちを中心に30名が参加し、傾斜25度の芝生の上をプラスチック製のソリに乗って30m先のゴールまでのタイムを競います。プラスチックそり大会は、冬季オリンピックの正式種目になっている「ボブスレー・リュージュ・スケルトン」のソリ競技の魅力を知らせてもらうことを目的として、宮城県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟が主催し、仙台大学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部が「仙台大学の専門教養演習」の授業の一環として協力し、行なわれました。

第2回である本大会では、仙台大学の学生が怪我や事故の無い様、準備運動や諸注意を話した後、子供たちはそりを速く滑るコツや乗り方・止まり方などを教わりながら練習をし、また、更に速く滑る方法など、最終的にはレースを行いました。第2回ということもあり、昨年よりも終始、歓声を上げながらそり滑りを存分に楽しみました。

村田町から訪れた小学2年生の男子児童は、「思っていたよりも坂は急で転びそうになったけれど、教えてもらったとおりにまっすぐ滑ることができたので、とても楽しかったです。」と話してくれました。また、昨年の第1回大会も参加した



柴田町の小学2年生の女子児童は、「去年よりもうまく滑る事ができました。また来年も遊びに来たいです。」と感想を述べました。

その他、プラスチックそり大会ではボブスレー・スケルトン競技のことをより知って頂く為の競技紹介のブースを設置しました。ここでは、実際に競技をしている様子の映像や道具、オリンピックのグッズ、ナショナルチームに所属している学生の「JAPAN」と書かれているウェアの展示などを行いました。初めて見る道具やウェアなど子どもたちは興味津々に見てさわり、ブースコーナーを楽しんでいました。

今回のプラスチックそり大会を通して、本ボブス



レー・リュージュ・スケルトン部の佐用向日葵（さよう・ひまわり）さん（体育学科3年一宮城・泉松陵高校出身）は「多くの方々のご厚意やご協力のもと、今年も大会開催にこぎつけました。大変な事もありましたが、子ども達が楽しんでそり滑りをしている姿を見て、頑張った良かったと心から思いました。この企画を通して人との関わりの暖かさや大切さが身に染みて、今後の自分を明るくしてくれる財産になりました。沢山の『ありがとう』の気持ちに囲まれ、心から感謝したいです。」と話しました。

これまでの経験を活かし、第3回目の大会も企画・開催していこうと考えております。今後も地域に根付いてこのようなイベントを開催し、2018年平昌・2022年北京と続く冬季オリンピックに向けて自分たちの競技力向上はもちろん、地域の方々にも応援されるような選手の育成・競技普及を目指し活動して参ります。

【報告 新助手 進藤亮祐】

## 鈴木省三統括副学長が仙台キワニスクラブで講演 「アンチエイジング戦略」



アンチエイジングについて講演する鈴木統括副学長

11月24日（木）、仙台キワニスクラブの招きにより、鈴木省三統括副学長は国際ホテルにて「アンチエイジング戦略」と題した講演を行い、37名もの会員の方々が熱心に耳を傾けました。

キワニスクラブは、全世界85ヶ国の主要都市に7400クラブ、約20万人の会員を有する奉仕団体で、ライオンズクラブ・ロータリークラブ同様、さまざまな慈善事業に力を入れています。

同クラブは活動の一環として、毎月2回講師を迎え講演会を開催しており、例会委員長で産経新聞東北総局長である白濱正三氏の依頼により本年4月に阿部学長が「いじめについて考える」という講演をし、大変好評だったことから今回のお申し出となりました。

最初に鈴木統括副学長は、「アンチエイジングの基本は動く事。人間は寝たきりになると2日で1%の筋肉がなくなり、10日間寝込むと5年分の筋力が減ってしまいます。高齢者を寝かせておかず、座る時間よりも一>立つ時間一>さらに歩く時間を長く日常生活に取り入れ、最終的に運動へと導くのが大切です」と話されました。

日本人の平均寿命（男性81才、女性87才）が世界的に高いことは喜ばしいですが、いわゆる寝たきりの期間が男性で10年、女性で約13年もあり、平成20年に実施した調査では40歳以上の宮城県のメタボ率が全国ワースト1位だそうです。そこで鈴木統括副学長は「健康」で「長寿」のありがたみを噛みしめるために今すぐ実践できるポイントを紹介されました。

### ①運動

1つは運動で、会場にいる全員が目を開けたまま片足で2分間立っていられるかどうか？を試しました。すぐヨロヨロとバランスを崩す方、1分

保つのがやっとだった方〜と37名中、最後まで立っていられたのは7名のみ。みなさんは、簡単に見えてこの程度の運動すら自分にはできないのか？ということ改めて認識し、鈴木統括副学長の「『貯金』ではなく『貯筋』が大切です」の言葉に大きく頷きました。例えばプロスキーヤー三浦雄一郎氏のお父様である敬三氏が99才でモンブラン滑降を成功させた通り、継続すれば寝たきり・骨折・転倒・脳疾患といった要介護状態を回避することができるそうです。

### ②脳のトレーニング

次に、昨今、ますます深刻化している認知症の予防は脳を鍛えることで、本を読むよりも、楽器の演奏、それよりもチェス、最も良いのはダンスだそうです。ダンスにより平衡感覚を養い、脳にも良い刺激になるということでした。

### ③栄養

最後は栄養です。身近な朝食から見直してみましよう。鈴木副学長は「完全無欠なコーヒー」の作り方を紹介しました。

コーヒー豆を挽き、カビていない新鮮なアップグレードコーヒーとグラスフェッドという純粋なバター、ブレインタンオイル（中鎖脂肪酸）をミキサーなどで混ぜ合わせて飲むだけで簡単、かつ栄養価が高くとても美味しいそうです。このアンチエイジング方を自ら実践して3か月という鈴木統括副学長は非常に体調が良く、減量できたのみならず、呼吸法を取り入れて腹筋を“シックスパック”に変えたとのことでした。

キワニスクラブ会員の年齢層が50才〜80才と、まさにアンチエイジングに最も興味のある世代だけに、みなさん真剣にスクリーンへ映し出された資料を見つめ、ところどころメモを取りながら聞き入っていました。

会員の1人でアサヒビール株式会社東北統括本部の副本部長、日本ソムリエ協会認定ワインアドバイザーでもある田中大（たなか・まさる）氏は「健康的に年を重ねることに関し実に実践的な内容で、大変ためになりました。今日教えていただいたなかから、自分でもすぐに始められそうなものを選び、スタートしてみます」とおっしゃっていました。

スポーツを科学する仙台大学らしい、運動と栄養の重要性についてアカデミックでホットな話題を提供する場となりました。

## ゴンザガ大学視察報告

米国大統領選挙の渦中にワシントン州スポケーンを訪問し、明成高校出身で昨年の日本バスケットボール代表候補となった八村 塁が、教育環境が素晴らしいゴンザガ大学で、学業・バスケットボール競技とも、順調に経過していることを確認したので、以下、報告する。

期日 平成28年11月3日～9日

場所 ワシントン州スポケーン市・シアトル市

訪問者 朴澤理事長

マーティ・キーナート仙台大学副学長  
中村明成高校教頭

### I バスケットボール競技

3日夕刻、ゴンザガ大学到着後、直ちにアシスタントコーチ兼選手獲得スカウトのLloyd, Tommy氏に導かれMcCarthy Athletic Center(メインアリーナは6千人収容)での男子バスケの練習風景を見学した。

5日夜は、満席の同施設で、NCAAシーズンインに先立つWest Georgia大学とのエキシビジョンマッチを観戦した。地域住民が学生とともに同一色の応援服で集うという、私立大学の地域融和と米国のスポーツ文化の一端を垣間見た。

日本人関係者の観戦ということもあって、背番号21の八村も試合後半に出場の機会を得て、短い時間のうちに、ダンクシュート2本、3点シュート1本を含む9得点を挙げ、存在感を示していた。



試合で活躍する八村塁選手

(帰国後の12日、Red-Shirtではなく、正式選手として登録されたとの連絡が入り、めでたく初年度からNCAAに出場できることとなり、早速、初戦のUtah Valley大学戦でデビューを果たした。エキシビジョンマッチ後に挨拶したヘッドコーチのMark Few氏によれば、英語力がつけば、八村の活躍の場はどんどん広がるだろうとの由だった。)

### II ゴンザガ大学

ゴンザガ大学は、米国北西部ワシントン州東部

に位置するスポケーン市に所在する私立大学である。スポケーン市は、人口20万人弱、シアトル市に次ぐ州内第2の都市であり、自然が豊かで治安も比較的良好である。

ゴンザガ大学は、1887年にローマカソリック教会Jesuit派が設立した総合大学(Liberal Arts)で、学生総数7400人(うち学部生約5000人)の中規模大学である。

学部には、教育学の一部としての体育(Physical Education)領域があり、EducationとHealth & Fitnessの学位を付与している。修士課程には、同じくSport & Athletic Administration領域が設置されている。キャンパス環境の好感度が高く、非常に学生の面倒見が良い大学との印象を受けた。各種アウトカムも高位を示しており、学生の卒業率、学内残留率等は、全米の中規模校のなかではN01、全大学のなかでもトップ30内に入っている。GPA平均は3.73、ST比も11.1と面倒見の良さが反映されている。ちなみに授業料その他諸々を入れた平均費用は、年5万3千ドル強となっている。海外からの留学生が250人おり、日本人も数名見かけた。

スポーツも盛んであり、男子バスケットボールの他、女子バスケットボール、男女漕艇、同サッカー、男子野球などがNCAA Division 1に属する強豪チームとなっている。アスリート管理部門のChris Standiford氏から、私立大学としてのスポーツ施設整備と財務について、色々と話を聞くことができた。

八村塁に対する教育上の配慮も非常に行き届いており、本人の修学上の便宜について大学挙げて対応してくれていることが良く理解できた。

学生アスリートの教学面サポート組織のディレクターであるSteffany Galbraith女史、およびアスリート専属チューターのRian Oliver女史の両名が八村の教学面の管理を担当しており、八村の大学4年間のセメスター別履修計画をきめ細かく設計し、特にOliver氏はほぼ毎日、本人と連絡を取ってくれている由であった。本人の英語力向上はまだ緒に就いたばかりであり履修上の今後の困難も予想されているが、何より八村本人の人柄の良さが必ずや成果に結びつくであろうというのが、両者の弁であった。(次ページに続く)



### Ⅲ アメリカ(スポーツ産業・大統領選挙)

今回行程中には、米国スポーツ産業で最も規模の大きいプロ・フットボール競技について、シアトルで実態を視察する機会も得ることができた。同時に、米国からの帰国が大統領選挙当日ということもあり、世界最大の注視の的である歴史的出来事の渦中の米国の様相を実感することができた。

#### ○プロ・フットボール視察

7日夜、シアトル市センチュリーリンク・フィールドで、アメリカン・フットボールのシアトル・シーホークスの試合を観戦した。収容人員6万7千名の観客席は、ほぼ満席であった。料金400ドル前後の座席であったが、仮に全席がその金額としても、それだけでも1日売上28億円ということになる。試合会場に隣接するセレモニー広場では老若男女全てが試合前に楽しめる様々なアトラクションが実施されていた。シーホークスの試合は応援席の騒音で有名とのことであったが、確かに耳栓が必要であった。中間の休憩時間中にフィールドで実施された傷痍軍人を称えるセレモニーが印象的であった。



赤丸がアメリカンフットボールのセンチュリーリンク・フィールド  
白丸は野球のシアトル・マリナーズの本拠地セーフコ・フィールド

#### ○大統領選

帰着した成田空港(日本時間9日午後)にて、トランプ氏優勢のニュースが流れ、結果は米国メディア事前予想の全滅というトランプ大統領の誕生となった。シアトルで若い米国人男性との会食の機会を得た。アラバマ州の有力大学を卒業し、地元設計会社、3M社、ボーイング社に勤務する米国の今後を担う若者達である。それぞれ、クリントン、トランプ、そしてグリーン・パーティという3者3様の支持態様であった。シアトルで遭遇した物乞いの若者を含め、米国の現状の縮図を感じた。

【報告 朴澤泰治 理事長・学事顧問】

## 運動栄養学科「給食運営実習Ⅰ」



運動栄養学科の授業として、栄養士免許取得のための必修科目「給食運営実習Ⅰ」(3年次開講)があり給食運営能力を修得することを目的に大量調理の実習を実施しています。実習では①栄養バランスや彩りを考えた献立づくりから②発注業務、③調理作業、④衛生管理まで一連の作業を学生が主体となり食事の提供を行っており、今年は11月4日～12月16日までの毎週木曜と金曜(全12回)に実施されています。

この実習では、出来上がった給食を調理した学生たち自らが検食するほか、食材相当額の食券8～15食を給食メニューとして希望する教職員へも販売し提供しています。味付けや盛り付け、接客態度など食後アンケートなどを実施し客観的評価なども得ながらより良い実習となるよう次のメニュー作りに生かしています。彩りを考えた力作

の美味しい給食メニュー(エネルギー量(kcal)の設定は20代男女の平均値)は、実習の回数を重ねる毎に腕を上げ、リピーターの教職員もいるほどです。

～運動栄養学科の学生の皆さん、来月も栄養たっぷりの給食を楽しみにしています！～



左から大久千里さん、堀内くるみさん、大友佳苗さん、吉住拓人さん  
(※青い帽子着用)

「ほうれん草など冬の旬の野菜を取り入れ、パプリカなどで見た目もカラフルにし喫食者が見た目でもおいしく感じるようにと「和風」のレシピをみんなで作成しました。野菜も高騰するなか食材費を400円の中で材料と味付けを工夫し食べやすいメニューを心を込めて作成しました」と4人を代表し吉住拓人さんが話してくれました。

## 柴田町制施行60周年 「第1回柴田町フットパスウォーク」を開催



町内の由緒あるお寺なども散策

11月3日(祝・文化の日)、「柴田町制施行60周年第1回柴田町フットパスウォーク」を柴田町と仙台大学が地方創生事業の一環として共催し実施しました。

「フットパス」はイギリス発祥で森林や田園地帯、古い街並みを歩き自然を楽しみながら地域の歴史や景観を楽しむものです。柴田町が提案する2つのコースに柴田町内外から83名の参加があり「船岡コース」4グループと「槻木コース」3グループの計7グループに分かれ、柴田町ガイドサポーターによる解説を聞きながら町内の史跡各所を約2時間かけて歩きました。グループそれぞれに本学学生ボランティアが帯同し、写真撮影をしたり交通整理をしたりと活躍し参加者の方々と共に柴田町の良いところを再発見していたようです。

フットパスコースを楽しんだ後には、仙台大学25記念館「なちゅら」において、柴田町の特産品を使用した昼食を堪能し、栄養バランスのとれたレシピを考案したスポーツ栄養士の岩田 純准教授の説明に熱心に耳を傾けました。学生達が道中で撮影した

各グループ毎の写真を溝上新助手がスクリーンに投影すると、会場からは歓声があがり当日のコースを再度確認しつつ楽しんでいる様子も伺えました。この他、参加者が気軽に立ち寄れるよう工夫を凝らした「健康カフェ」、「ノルディックウォーキング初心者体験コーナー」「体組成測定・骨密度測定コーナー」などのブースを設けイベントも開催しました。「仙台大学方式の座ってできる楽しい体操」では運動後の体ほぐしをしながら有意義な時間を過ごしていただきました。最後に、柴田町特産の新鮮野菜や新米、柴田町商工会の商品券など、参加者全員に商品が当たる大抽選会も開催し、最後まで秋の一日を満喫して無事すべてのプログラムが終了しました。閉会の挨拶で柴田町地方創生対策室の平間室長から、2年後に柴田町においてフットパスウォークイベントの全国大会が開催予定であることが紹介され、今度は全国からの来訪者をおもてなしする側としてまた参加して頂けたらありがたいと話され会が締めくくられました。



健康カフェやノルディックウォーク、抽選会なども行われました

## 2名の中学生が本学で職場体験

11月1日(火)～2日(水)の2日間、槻木中学校2年の大沼鉄平君と大久保裕真君の2名の生徒が本学で職場体験を行い、留学生寮である国際交流会館の清掃作業や図書館書架整理、広報室での新聞記事整理などを体験しました。2日間、本学での体験を通じて大沼君は「図書館での図書整理などは思ったより大変でした。」、大久保君は「国際交流会館内の清掃で、汚れがなかなか落ちなくて大変でした。」とそれぞれ感想を述べてくれました。

本学では毎年、町内の3つの中学校から職場体験を行う生徒を受け入れています。



新聞の記事を整理する大沼君(右)と大久保君

## 「子ども運動教育学科」学生募集 高校訪問記

「仙台大学に新しい学科が誕生するという話を進路指導部長から聞いておりました。」開口一番に伝えてくれたのは、11月18日（金）に学校訪問させていただいた秋田県内の高校の教頭先生でした。

平成29年4月に開設される「子ども運動教育学科」への学生募集活動として、9月、10月の文部科学省、厚生労働省関連の設置認可後、第1弾として10月に宮城県内、第2弾として11月に東北各県の高校へと訪問の輪を広げてきました。

訪問を実施するにあたり、新学科が設置されることの周知そして認知度を高めるために、全学の教職員の方々に高校の情報提供をお願いしました。その結果、短期間に旧知の方や先輩・後輩の先生、さらには部活動関係の知り合いの方々をたくさん紹介していただきました。全学の教職員から寄せられた情報は大変貴重で、実質的な募集活動開始の遅れを少しでも補う上において大きな力となりました。

訪問した高校関係者の方々からの声を集約させていただきますと、仙台大学としての知名度はこれまでの入学実績などから大変高いものがありますが、「子ども運動教育学科」となると冒頭に紹介した高校のように情報が共有されている学校はまだ少ないというのが実情ではあります。しかし、学校を訪問し話を聞くことは、仙台大学体育学部としての伝統に立脚した幼年期の運動教育の基礎を学ぶ新学科設置の趣旨についての理解を深めていただけるよい機会となっております。

一人でも幼児期の運動に関心もち、幼稚園教諭や保育士として将来活躍したいと考えている受験生が本学科に入学を志願することを願い、これからも学校訪問、情報収集を続けていきます。

【子ども運動教育学科 学科長久能 和夫】



## 第38回みやぎ大菊花展柴田大会

「花のまち柴田」の秋の風物詩、第38回みやぎ大菊花展柴田大会が船岡城址公園を会場に絢爛豪華に開催されました。会場には6市3町の11団体の菊の愛好家たちが丹精を込めて作り上げた大菊3本仕立て、達磨作り、福助作り、小菊盆栽作、盛り菊あわせて計2,746鉢の力作ぞろいの菊が立ち並び、過去最高の6,920名の方々が来場しました。

また出展された菊のうち、審査対象菊となったのは558点で、全菊連山形支部2名の審査員による5時間に及ぶ審査が厳正に行われ5部門127点が選ばれました。

平成21年からは「仙台大学学長賞」も設けられており、今年の仙台大学学長賞は泉高森菊の会、村上あい子さんの「国華金山（こっかきんざん）大菊の部」が受賞され、会場では堂々と見事な大輪を咲かせていました。29日には柴田町役場で表彰式が行われ阿部学長から賞状と楯が手渡されました。



ご主人の村上健夫さんに代理授与

平成28年度 「仙台大学学長賞」受賞

作品名「国華金山（大菊の部）」

村上あい子さん（泉高森菊の会）のコメント

「夫婦揃って菊を育てて約15年になります。今年は、大菊100鉢、達磨が30鉢、福助30鉢、小懸崖4つ、盛り菊20鉢を育てました。丹精込めて作った作品ですので、受賞はとても嬉しいです。」

## ヨガ講習会を開催

最近、フィットネスクラブなどで、ヨガやホット・ヨガが大盛況です。またNHKでも、しばしば瞑想やマインドフルネス（瞑想から宗教性を排除）のストレス軽減、集中力アップ等の効果が取り上げられています（サイエンスゼロ、ガッテン、NHKスペシャルなど）。そこで、卒業生のヨガインストラクター中村孝子氏（健康福祉学科4期生、インド中央政府公認ヨガインストラクター、健康運動実践指導者、仙台市体育館や青葉体育館でヨガ講師）に依頼し、11月17日（木）、第5体育館アリーナを会場にヨガを実際に体験するヨガ講習会を開催したところ、学生24名（男子14名、女子10名。ほぼ全学科より、大学院生2名も含む）と教職員6名の計30名が参加しました。学生の所属する部活動も剣道、柔道、空手、サッカー、野球、トレーナー、介護系等々多彩でした。

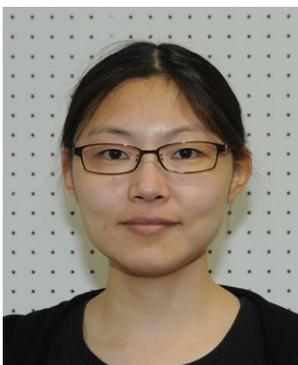


ヨガを体験する学生

また、同日の3時限目には健康福祉学科「健康支援・介護予防演習」の一環として、受講する学生を対象としたヨガ体験も行いました。

参加者からは「スッキリした」「よかったので、その後も自分で続けている」「是非大学のコースに取り入れてほしい。」などの感想が寄せられました。また、アンケートからは、受講学生のヨガへの関心の高さが見てとれ（特に、女子）、今後も、健康福祉・スポーツとヨガなどとの関連を考えていきたいと思いました。なお、当日の動画のDVDがありますので（講習会、演習とも）、ご覧になりたい方は小松正子までご連絡下さい。また、講習会開催にあたりご協力いただきましたたくさんの方々にご場を借りて御礼申し上げます。

【報告 教授 小松正子】



講師の中村孝子さん  
（健康福祉学科4期生）

### 【講師より】

11月17日（木）、ヨガをご体験いただきました。お昼休み、そして3コマとも参加者さんの多くが初めてという事でしたが「気持ちよかった」、「リラックスできた」などの感想をいただきました。

ヨガはスポーツと違い、外と競う事はありません。自分の内面へと意識を向けていき、ポーズと呼吸で心と体をほぐしていきます。ストレス社会の現代の中で、日常から離れ、自分へと集中する時間はとても大切です。

“今”という時間に集中して心と体をメンテナンスし、ニュートラルな状態へとリセットされることで次への活力にも繋がります。

また、体の状態（柔軟性や筋力など）は皆違います。それが個性であり、それにどれだけ沿ったポーズができるかというのが大事です。自分を知ることがとても大切です。目に見えず、自分でコントロールするのが難しい心も、体や呼吸からのアプローチで良い状態へと導いていきます。集中力も増し、ストレス緩和、リフレッシュ、エネルギーが漲るなどの効果が期待できます。今回のヨガのご体験を機にもっと興味を持っていただけたら嬉しいです。

## 第9回青少年防災訓練ワークショップ円卓会議報告



東日本大震災の教訓からの学びについての発表する谷内遙君

今回の国際円卓会議は、生命倫理に関わる防災についてのテーマで発表され協議をした円卓会議でした。私は、アメリカ合衆国における緊急時における防災システムと指導マネージメントについて発表しました。学生の谷内遙（たにうち・はるか）君は、出身地気仙沼市で体験した津波災害の復興の体験をもとにボランティアのあり方について発表しました。参加国は、日本をはじめニュージーランド、インド、イラン、フィリピン、バングラディシュ、韓国、香港、ロシア、ネパールから集結し、またスカイプにてメキシコ、カナダに加えて仙台大学LC棟より3名の学生（國井海君、浅井美樹さん、小原迅登君）がスカイプにて発表と協議を行いました。実際には、JR利用者の他4名（栗山仁君、坂下聖也君、小野寺理奈さん、金千晶

さん)もこの日のために準備をしてきたが、地震の影響で不通となり参加が困難となってしまいました。谷内遙君が発表した日は、東北地方で早朝5:59に大地震(M7.3、震度5弱)が起きた11月22日で、主催者を始め参加者らが安否を心配して頂きながらの発表でした。遙君の発表を聴き参加者らは、自分自身が被害を受けても自らの力で家族と協力して自立していこうとする実体験に心を動かされ涙を流す参加者もいた。司会進行をされた熊本大学石原明子先生の遙君を始め仙台大学の学生達の発表と質疑応答について高い評価と感謝の気持ちをして下さった。遙君自身、今回自らの体験を英語で発表したことで、熊本大学大学院博士課程のネーサン・レイ・アリム（フィリピン留学生）氏や同大学で防災ボランティアに携わっている大学院修士課程1年生の片橋匠氏との交流も今後とも継続されるようでした。【報告 教授 高橋 亮】



仙台大学LC棟からもスカイプで会議に参加

### 谷内遙さんの発表内容（抜粋）

仙台大学 谷内遙

Sendai University Haruka Taniuchi

私は地震が起きたとき中学一年生でした。私はあの出来事を忘れることができません。

I was a seventh grader when the earthquake happened. That is an incident that cannot be forgotten.

私はあの時教室にいました。地震はとても強く、自らの意志では動くことができませんでした。またその瞬間は、何が起きたのか理解することができませんでした。蛍光灯は割れ落ち、クラスメイトは泣き悲鳴を上げ、壁はボロボロと崩れ落ちていました。それはフィクションのようにも感じられました。長い揺れが一度収まり、担任の先生と私たちは校庭に一時避難をしました。多くの生徒が泣いていたのを覚えています。私はすぐに祖母が迎えに来て高台にある叔父の家に弟と祖母と避難しました。そこで私は信じられない景色を目の当たりにしました。黒い濁流が私の家を破壊していました。何が起きているのかはっきりと理解していないのに涙が溢れとまらなかったのを覚えています。

I was in the classroom at the time. The earthquake was so strong. I could not move and I didn't know what was happening. The classroom's fluorescent lamps fell and cracked, my classmates cried, and the walls were destroyed. It felt surreal. When the earthquake stopped, the students and teachers ran to the school ground. Many students were crying. Soon my grandmother came with my younger brother to pick me up and we went to my uncle's house, which is located on a hill. There I saw the house swallowed by the Tsunami wave. I couldn't believe my eyes. I was too shocked to cry.

それから数日間、親戚の家でライフラインがない状態で毎日生きる事だけを考え、過ごしました。町の惨状に私は幼いながらも怯えていました。一週間ほどたち、家の様子が気になっていた祖父と共に私はサイズの合わない長靴と作業着を着て家まで歩いて行きました。道路には家があり、魚、がれきりが転がっていてヘドロでアスファルトが見えませんでした。そのため、流れてきた発泡スチロールで足場をつくりながら歩いたので普段、20分ほどで着く道のりに一時間以上かかったのを覚えています。やっとのことでたどり着いた家を見てそこでも私は涙がとまりませんでした。家は変り果て玄関には車が2台突っ込んでいました。2階を残して1階は家と呼べる状態にありませんでした。私は汚れた袖で涙を必死に拭きました。

Over the next several days, I lived in fear. I was very scared of our destroyed city. A week later, my grandfather and I walked to my house. I wore my uncle's rubber boots and working clothes, which were too big for me. Houses, fish and rubble were scattered on road. I couldn't even see road because debris covered the asphalt. It took a long time to make it to my house. Before the disaster, I could get to my house in 20 minutes, but it took us an hour. My tears didn't stop when I saw my house. My house was completely destroyed. There were two cars in the house entrance I wiped my eyes using my dirty arms.

翌日、祖父は一人で自宅を片付けるといい始めました。しかし、家族全員がそれに反対しました。当時72歳の祖父があの家を一人で片付けられると家族は思わなかったからです。というのも私の家には父がおらず、男は祖父と私と小学3年の弟だけだったからです。私は今と違い身長が148cmしかなく、とてもではありませんが力仕事をごさせるように家族は感じなかったのだと思います。私も家族と同様に祖父一人であの状態をどうにかできるとは思えませんでした。私はなんとか家族の役に立ちたいと思いました。そこで私は反対を押し切り自宅に向かう祖父に、頼み込んで片付けに連れて行ってもらいました。しかし中学一年の私にとってその仕事は大いに危険で、大変でした。がれきは釘が飛び出し、ヘドロには油が混じり相当な重さでした。一日目で全身が悲鳴をあげていました。また、それが二週間ほど続きました。当然私にはとてもハードな仕事でしたが、弱音を吐かず仕事を続ける祖父を見て尊敬し、私も弱音を吐かず頑張らなければと感じ、やり抜くことができました。

The next day, my grandfather said he would clean the house by himself, but we did not think that was a good idea since he was 72 years old. My father had divorced from my mother when I was young, so the men in my family were my grandfather, my younger brother and myself. I was only 148 cm then, so my family thought I couldn't really help my grandfather. I thought so too, but I really wanted to help him. I asked him to take me along, and he agreed. However, this job was very dangerous and difficult for me. The debris was heavy, and it contained oil. We were exposed to nails and other dangerous sharp things. I was tired after one day's work, and we worked on this for 2 weeks. I was exhausted, but I did not want to stop because my grandfather never complained.

I lost many things, and I was emotionally and mentally damaged as a result of the disaster. However, the disaster also taught me many things. Before the disaster, I didn't really have connections with different types of people, but I learned some important lessons from this disaster.

When we cleaned my home, we couldn't deal with our refrigerator. We were embarrassed.

## B・L・S部 宮嶋克幸選手がノースアメリカンカップで優勝

このほど、カナダのカルガリーとバンクーバーを会場に開催された「ノースアメリカンカップ」第3戦でB・L・S部の宮嶋克幸選手（体育学科3年-札幌丘珠高校出身）が見事優勝を果たしました。また、宮嶋選手は第1戦と2戦で6位、第4戦で2位に入りトータルポイントでも1位となりました。

宮嶋選手の他にも有明宏祐選手（運動栄養学科4年-仙台商業高校出身）と釣船さやか選手（体育学科2年-仙台商業高校出身）も出場し活躍しました。

11月29日（火）には大会に出場した3名と監督の鈴木省三教授とて阿部芳吉学長を訪れ、大会の結果を報告しました。宮嶋選手は「2年後の韓国・平昌オリンピック出場を目指し更に練習に励んでいきたい。」と今後の意気込みを語ってくれました。



宮嶋選手（左）、釣船選手（中央）、有明選手（右から2番目）

## 漕艇部 全日本選手権で優勝

11月10日（木）～13日（日）の4日間、埼玉県戸田ポートコースで開催された「第94回全日本選手権大会」において、男子舵手つきフォアで優勝しました。このほか、男子舵手なしフォア、男子舵手なしクォドルプルでもそれぞれ第3位に入賞するなど大健闘しました。

男子舵手なしフォアでの優勝は8年ぶり2度目の快挙で、主将の岡田遼大選手（体育学科3年-島根県江津工業高校出身）は、「1年間準備してきた成果を出し切ることができました。来年は創立50周年の節目の年でもあるので、目標を明確にして練習に取り組みたいです。」と話していました。

なお、11月21日（月）には、朴澤理事長・学事顧問、阿部学長に優勝と第3位入賞の報告を行いました。



理事長・学事顧問と学長に優勝と入賞を報告した漕艇部員